

『こころ』人間の罪

Junko Higasa 2015.7.5

人間は「人間」^{じんかん}すなわち人と人との関わりの中で生きている。個人が全員自由に生きていたら社会は成り立たないので、法律や道徳があり、共生のために教育がある。しかし社会構成上の立脚地の違いによる教育には格差があり、教育を受ける者には精神的個体差がある。そこで個々人は、自分のエリアにおいて、人生を無事に楽しく全うすべく「碁盤の目」の一つを確保して日常を乗り切る訳である。

その大事な「碁盤の目」の保持に危機を感じた時、人間は未然に利己的自己防衛本能を発現させる。それが先生の K に対する精神的攻撃である。そして K は物質的圧迫により先生に精神的衝撃を与えた。これは「恋」という当時の男にとっての外敵なしには起らなかった戦争であり「人間の罪」の原凶である。

これを国に当てはめてみると、鎖国壁内の碁盤の目で暮らしていた日本の西洋化促進という自国防衛は「欧米列強」という外敵なしには起らなかった。そして西洋文明輸入による物質的向上に伴い、図らずも拡大したキリスト教の国家神道圧迫の世情は、K に物質的向上をもたらし、思想転換を促した先生という個人に映る。東西精神の狭間で事件は起こる。

追い詰められた精神により、在ってしかるべき命が「暗殺」という他者の振るう不自然な暴力で奪われ、「人間の罪」の重みに耐えきれず「殉死」という自己に振るう不自然な暴力で失われたのは惜しい。